

---

# 技術と心

昭和60年10月「愛知電機技報」第一号が発刊されて、早や第5号を数えることとなり、誠に喜ばしい限りである。

今回私に「巻頭言」の「おはち」が回ってきたが、私は電力関係では50年を越すが、メーカーとしての歳月は僅か2年有余で、この技報に相応しいことが書けるか、甚だ疑問であるが、所感の一端を駄文に纏めることとする。

本年は創立45周年を迎えるとともに、発足からの主力製品である柱上変圧器の200万台突破を達成した、誠に意義ある年である。

また電力会社殿の内需拡大政策に伴う、設備の増強計画の推進に依りて、連日非常に充実した生産を続けさせて頂いている。

視野を拡げて顧みれば、資源の全く無いと言っていい我が国が、幾度かの難関にもめげず、すばらしく発展した裏には、弛まぬ努力と共に著しい科学技術の進歩発展の賜と極言しても過言ではない。然し、余りにも急激な経済の膨張に対し、今や世界は目の仇として、到る所で苦情、摩擦が激化していることも否めない。特に進歩の著しい電気を主体としたエレクトロニクス、メカトロニクス産業において甚だしい。蓋し、物的資源に恵まれない日本に与えられた唯一の資源は優秀な人的資源であり、特に良質な頭脳資源である。この力を結集して技術立国としての責務を果たさなければならない。

特にメーカーである我々は常にユーザーニーズを先取りし、高性能高品質の製品開発に努め、ユーザーの要請と満足に的確に答えなければならない。

当社では、ユーザーと協同して研究会をもち積極的に開発、研究に取り組んでいるのは誠に喜ばしい。

更に次世代産業の基礎となる専門技術を深く掘り下げ、製品化への足掛かりを築くことが必要である。また、これらの専門技術、新技術を採用入れることによって、在来製品に知的機能を付与してユーザーニーズに応えるとともに、付加価値の増大を図らねばならない。

最近の工業関係の新聞は勿論一般紙においても、超電導の文字の見当たらない日はない。新技術と言えはこれまで、半導体を中心とする、エレクトロニクス応用の軽薄短小型が総てであったが、超電導の研究と開発が進めば、暫し日陰に寂れていた重厚長大型も陽の目を見ることになる。超電導変圧器を目標として、液体窒素冷却変圧器の研究に産学協力体制で取り組んでいる。大いに期待する処である。

取締役会長 吉田弘一



次に経済性の追求である。如何に優秀な製品でも、価格的にユーザーの希望に沿った適正なものでなければ、高根の花に留ってしまふ。技術の向上と原価の低減は不離一体である。逸品で高価が賞せられるのは工芸品で、工業品ではない。技術者、研究者と雖も経済性に徹しなければならない。

私はこれまで技術は「心の通った技術」でなければならないと、屢々述べたり、書いたりした。人間性を没却して「より大きく」「より速く」と極限を追い続けるのみの技術であってはならない。ジャンボ機の墜落、スペースシャトルの空中爆発、チェルノブイリ原発事故等最高の技術を集積した中にも、欠陥が間々発生し、後を絶たない。

科学技術の進歩があつてこそ、経済は発展し、生活の向上することは疑いもないが、科学技術はあくまでも人間の幸せと結びついたものでなければならない。自然と調和し技術と心の融合が絶対条件である。それには造る人、操る人が信頼される人でなければならない。信頼される人となる条件は——相手の立場に立つて考える。即ち造る人は使う人、売る人は買う人——この一言に尽きると思う。

最後にメーカーの一員となつて得た喜びの一端を述べる。丁度一年前ミクロネシア諸島のパラオ共和国を訪れた。日本政府の無償借款供与による“電力送電プロジェクト”が完工し、これを記念して日—パ友好記念碑が建立され、その除幕式と祝賀レセプション等一連の竣工行事に出席するためである。今回のプロジェクトは英国が建設途中で放置した16,350kWの汽力発電所の整備と、巨長20km、及び5kmの34.5kV送電線の建設と、両端の変電所及び変電塔に絡る13.8kVの配電線からなる電力システムの完工である。10MVAのトランス3台始め電気機器一切を当社が納入したので私の参加となつたのである。空高く両国旗が翻り、両国の国歌斉唱に始まつた完工式の印象は未だ脳裏を去らない。僅か4日間の滞在ではあつたが、大統領始め多くの方々から、日本の技術と製品の出来栄が非常に高く評価され、次の拡張にも是非とも、強く望まれ、多大の讃美と謝辞を頂いたことはメーカー冥利に尽きる。しかし、それだけに決してトラブルの生じない信頼度の高い製品を心がけなければならないことを痛感した。

今後も当社の経営理念である“和、技、信”の精神を核として弛まぬ努力を続け、さらに社会の信頼に応えることを願う次第である。